

福澤研究センター通信

Newsletter of Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies, Keio University

第7号 2007年9月30日 発行

目次

*『書簡集』編集の思い出 坂井達朗……………	2	*主な新収資料……………	8
*「正史」と「正史」を超えるもの —University Extension を事例に 米山光儀 ……	3	*主な動き……………	11
*講演会・セミナー概要……………	4	*諸記録……………	12



縦 560mm × 横 515mm

* アメリカで購入したチョッキ *

中津市故日野辰治氏旧蔵。日野家は福沢諭吉の長姉小田部礼の縁戚。昭和25（1950）年2月に大分市において行われた福沢諭吉没後50年記念の「福沢諭吉先生遺品展」にアメリカ土産のチョッキとして出品されたもの。おそらく慶応3（1867）年の渡米の際に購入したものと思われる。中央の写真は、これとは別のチョッキを着用した福沢。明治のはじめごろに撮影された。



『書簡集』編集の思い出

さか い たつ ろう
坂 井 達 朗

(福沢研究センター顧問・名誉教授)

2001年2月3日に迎える福沢没後100年の記念の事業として、福沢研究センターが何を行うべきか、検討が始められたのは1996年の夏であった。何回かの会合の結果、関係者の意見は、現行の『福沢論吉全集』刊行後の新史料の発見が最も多い分野である書簡に的を絞って、福沢の書簡集を編纂することで一致を見た。新史料はそのつど福沢論吉協会の機関誌である『福沢論吉年鑑』に発表されてきていたが、それらは当然発見順に紹介されるから、一貫性は十分ではない。同時にこの企画を広く世間に訴えれば、相当数の福沢書簡が発掘されるのではないかという期待も込められていた。

同じ頃、亡くなられた富田正文氏の御遺族から旧蔵書約6400点が、福沢論吉協会を通じてセンターに寄贈され、整理を開始した。その中に含まれた『全集』の第17・18巻に加えられた夥しい量の書き込みや貼り付けを見た竹田行之氏(当時の福沢論吉協会理事)は、この富田氏の遺産を生かした書簡集編纂のアイデアを得たと伺った。また『福沢論吉伝』以来、福沢の著作の刊行に特別の関係を持ってきた岩波書店が、塾当局に対して、『全集』刊行以後の福沢研究の成果を集大成した、新しい全集編纂の企画があれば、その製作と販売には協力を惜しまない旨の提案がなされたと聞いたのも丁度この頃であった。

こうした幾つかの動きが重なり合ったところで、没後100年記念の塾の正式の事業としての『福沢論吉書簡集』の刊行が決定された。刊行委員会が発足したのは1997年12月27日であった。

委員会の決定に基づいて、センター内部に事務局がおかれ、学内外から委員を委嘱し、編集の基本方針を決定し、凡例案と刊行までのタイムスケジュールを作成して、編集作業を開始した。こうしてその後数年間にわたる苦闘の日が始まった。

編集の基本方針としてまず考えられたことは、できる限り書翰の原本もしくは写真などにより読み直しをすることであった。その際に大きな力となったのは、『マイクロフィルム版福沢関係文書』であった。収録された1000点弱の書翰原本の写真は読み直しの能率を非常に高めた。書翰が福沢の全集に収録されるようになったのは昭和8年刊行の『続福沢全集』からであるが、その当時は勿論、現行の『全集』の編集の際も、正確なコピーを作ることは勿論、国内を旅行することの不自由さは今日とは比べものにならない。だから編者は所有者に筆

写を依頼して、それを原本としなければならなかった場合が少なくなかったと想像される。結局読み直しができたものは1700通弱であったが、これは20世紀末におこなった編纂の時代的な特徴と言うことができよう。

編集方針の特徴の第二は、書翰の内容に関して、背景になっている事柄と本文で言及されている人物に関して、できる限り詳細な注釈を附したことである。それは各書翰の本文の直後の「直後注」と、各巻の巻末に「ひと」および「こと」として纏めた。現行版の『全集』にも書翰によっては若干の注が付けられているが、それは勿論書翰の内容を理解するのに十分な量ではないから、今回の書簡集の眼目の一つがこの注にあることは間違いないが、編集委員が一番悩んだのもこの注であった。2600通余りの収録書翰のすべてに、曲がりなりにも注を付けることを得さしめたものは、これまで蓄積されてきた福沢および慶應義塾に関する研究の積み重ねである。修正を要する箇所は、すでに気づいているもののみでも何カ所もあり、また今後増えていくと予想されるが、当時における我々の精一杯の努力の結果であり、また今後の研究の深化への捨て石とご理解頂きたい。

特徴の第三は、用語および用字に関してである。書翰を書く場合の福沢は、例外なく候文を用い、筆記具は特殊な場合を除いて、筆墨を用いた。随って送り仮名は大胆に省略され、変体仮名、片仮名が混用されており、それが福沢書翰の独特の雰囲気を作りだしている。それを活字で表現する場合、『続福沢全集』以来一貫して、仮名はすべて正体の平仮名字体に直してきた。しかしそうした福沢書翰の独特の視覚的特徴を、印刷面ではあるが、多少とも再現できないかと考え、書翰原本を確かめ得る場合には、変体仮名の一部を、もとの字体に近い活字で再現した。この試みの当否に関して読者諸氏のご感想をうかがいたいと考えている。

今振り返れば無我夢中で過ごした5年間であり、未経験なことでも戸惑いも多かったが、2001年2月3日の墓前祭において、刷り上がった第一巻を霊前に捧げることができた感激は忘れがたい。幸い目立つほどの遅延もなく、全9巻を刊行し終えることができたのは、鳥居泰彦・安西祐一郎両塾長、刊行委員会の服部禮次郎顧問をはじめとする義塾関係者の暖かい御励ましと、献身的な努力を惜しまれなかった事務局の皆さんのおかげであったと、編集委員一同改めて感謝する次第である。



「正史」と「正史」を超えるもの —University Extension を事例に

よね やま みつ のり
米 山 光 儀

(福沢研究センター副所長・教職課程センター教授)

現在、福沢研究センターでは、来年に刊行される『慶應義塾150年史資料集』別巻の『慶應義塾史事典』の編纂が進められている。事典編纂の重要な作業のひとつに見出し項目の選定があるが、慶應義塾の場合、150年という長い歴史の中から項目を選択しなければならないので、その作業は難しく、編纂委員の判断が分かれる場合もないわけではない。日本では、100年史は多くの学校で作られているが、150年という長い歴史の学校史を作ったことがある学校は、ほとんどないといってもよい状況の中での編纂作業は、ひとつの重要な前例となるだけに、緊張せざるを得ない。

ここでは、何を取り上げるかのひとつの例として、University Extension に関わる項目について考えてみよう。『慶應義塾史事典』には、University Extension に関わる項目が掲載される予定である。University Extension を日本で最初に「大学教育普及」と訳した家永豊吉は初期の慶應義塾大学部文学科で教員をしていたこともあり、University Extension は慶應義塾の中で早くから知られていた言葉であったと思われる。しかし、慶應義塾では、その訳語として定着した「大学拡張」という言葉も含めて、あまり多く使われてはいない。一方、家永は早稲田大学の教員も務めていたことがあるが、早稲田大学では、現在でもエクステンションセンターがあることからわかるように、その言葉はしばしば用いられ、古くは1913年に発行された『創立三十年記念 早稲田大学創業録』で、校外教育部を University Extension と記述している。

このように早稲田大学の University Extension は有名であるが、慶應義塾で University Extension が行われていなかったかといえば、そうではない。明治初期の講義所講義や三田演説会、明治後期の「修身要領」普及講演会や地方巡回講演などは University Extension と言ってよいものである。これらの活動は、これまで慶應義塾が編纂した「正史」とも言うべき『慶應義塾五十年史』『慶應義塾七十五年史』『慶應義塾百年史』で取り上げられている。慶應義塾では、それらの活動をあえて University Extension とはいわないが、慶應義塾の活動の一環と考え、学校沿革史の中で取り上げてきたのである。

学校沿革史に University Extension の記述が見られるのは、慶應義塾だけに限らず、早稲田大学についてはすでに触れたが、他の私立大学でも、すでに戦前に発

行されたものの中に、その記述を見出すことができる。しかし、戦前に発行された帝国大学の学校沿革史には、University Extension に関する記述はない。帝国大学でも University Extension は行われていたが、学校沿革史にそれに関する記述は見られないのである。私立大学では、戦前から自らが展開してきた University Extension を学校沿革史に位置づけられるべきものと認識され、一方、帝国大学ではそのように認識されなかったのである。その違いは、どこにあるのだろうか。

私立学校は、それぞれに設立の理念があり、その理念を学校の外に発信していくことは必然であった。私立学校にあっては、経営は主に授業料に依存するが、学生を確保するためには、積極的に社会に働きかけていく必要もあった。特に、制度的に帝国大学と差別があった大学令（1918年）以前には、その必要は大きかった。一方、制度として守られていた帝国大学には、その必要がなかったのである。その意味で、University Extension は、私立学校にあっては、その学校の「正史」の中に取り上げられるべき項目であり、慶應義塾ではこれまでの学校沿革史で、実質的に University Extension と考えられる活動は積極的に取り上げられてきたのである。それは私立学校の「正史」として当然のこのように思われる。University Extension のように、正規の学生を直接の対象とするのではない教育活動が「正史」に取り上げられか否かは、その学校の理念に大きく関わっているのである。

ただ、University Extension は、学校として正規に行うもの以外にも、有志によってなされている場合もある。たとえば、慶應義塾理事の石田新太郎によって1924年に創設された成人教育協会は、慶應義塾関係者によって運営されたが、学校としての正規の活動ではないので、「正史」に記述されるべきものではない。しかし、その活動は慶應義塾と切り離して考えることはできず、実際の成人教育協会の活動は、慶應義塾の University Extension との関係もある。慶應義塾150年の歴史を豊かなものにしていくためには、そのような活動にも目を向ける必要がある。どのような項目を選定すべきか、「正史」を意識しながらも、「正史」を超えるものを作っていきたいものである。

中国と日本の近代化比較

セイ
盛

ホウ
邦和

(上海财经大学人文学院教授・同大歴史学研究所所長)



講演中の盛 邦和氏

私は、自著『内核と外縁・日中文化論』において外縁文化論を提起したことがあるが、本日はその観点から、中国と日本の近代化を比較したい。

世界の文化圏はそれぞれ中心地域の内核文化と、それを取り巻く外縁文化があるが、東アジア儒家文化圏

では、内核文化は中国であり、日本は外縁文化である。内核文化は伝統の強い記憶力があり、異文化に対する同化力がある。それに対して、外縁文化は他文化との複合性があり、新文化への抵抗感が弱い。

アジアの伝統の基礎には、アジア的生産様式があった。そこでは、土地の原始的共同体所有制が強固に持続し、政治的には東方的専制主義が行なわれた。また、中国では古代以来、所有や社会秩序に関して、天下を「公平」にすることを真理とする大道思想という伝統があった。孔子から孫中山、そして毛沢東まで、この大道思想に基づく平均分配思想が継承されてきた。この思想は、空想社会主義とも言えるが、中国アジア思想の最も重要なエトスで、儒家思想の魂である。

近代化には二種類ある。一つは、伝統を継承しながらの近代化であり、もう一つは、過去を放棄する近代化である。福沢諭吉は脱亜論で、古いアジアからの離脱を提起し、中国と朝鮮が改新の道を進まないことに、隔たりを感じた。これは、日本が外縁文化であったのに対して、中国は内核文化であり、朝鮮は半内核・半外縁文化であったためである。

1868年から1945年に至る日本思想史には、伝統思想と啓蒙思想が交互にあらわれている。しかし、自由思想と民衆政体が定着しなかったという点では、日本はアジア的であった。他方で、近代化と市場路線は一貫してお

り、この点から見れば日本は中国と違っていた。

中国の近代思想史では、李鴻章、張之洞の洋務思想、康有為、梁啓超の変法思想、章太炎の国粹主義思想、孫中山の革命思想、李大・陳独秀・魯迅・胡適の新文化運動、梁漱溟らの文化保守主張など、多くの思想が現われた。それにもかかわらず、1949年までは民主も自由も根を張ることはなかった。この点では、中国はアジアの国であり、1945年までの日本と同様であった。しかし、経済制度の選択に関しては、中国は日本とは異なり大道思想の伝統が強く、資本市場の罪惡を責め立て、「公平」を高唱し、結果として社会主義路線を選択した。

日本と中国のこの違いは、福沢諭吉と梁漱溟の比較からも考えられる。福沢が、アジアの内核文化脱却論を主張していたのに対して、梁漱溟は、中国内核文化回帰論を提示し、儒家空想社会主義を社会的行動指針として論述した。梁漱溟は、アダム・スミスの思想に反対し、市場制度を左翼の世界と見なし、アジア的農耕文明と中国古代文化に信を置いていた。この思想は、ロシアのスラブ思想やナロードニキに通じるものがある。

近代化するには、三つの挑戦を受けなければならない。一つは、危機に瀕した伝統からの挑戦であり、日本では三宅雪嶺や井上円了が、日本主義、アジア主義を唱えた。中国では梁漱溟のような思想が生まれ、インドにはガンジーの思想があり、ロシアではスラブ思想とナロードニキの主張があった。二つ目は市場経済がもたらす危機からの挑戦、三つ目は社会危機からの挑戦である。日本はすでに大正期に市場経済危機・社会危機を経験したが、中国は、沿岸部と内陸部の発展不均衡などから、今後、経験しなければならないだろう。三つの危機を経験した日本に学ばなければならないことはたくさんある。

中国は、儒家文化のよい面を保持し、悪い面と決別しなければならない。儒家文化のよい面は、調和を重んじる文化である。中国の文化は、あらゆる世界の先進的文化と協調して融合する包容力がある。中国と日本は、歴史上、長い友好関係を維持してきた。今後も、和を以て長く付き合わなければならない。孔子の思想は、和の思想であり、調和を目指せば日中は経済においても文化においても繁栄へ共に歩むことができる。

世界の中心は、常に内核文化から外縁文化へ移ってきた。とすると、今後の中心は、アメリカの外縁にある国

であり、楽観的に考えれば、日本の経済と華人経済圏の融合体となる。日本と中国が調和を以て交流してゆくことで、日中関係は、今日の天気のように春の季節を迎えると言える。(文責 小室正紀)

(本稿は2007年5月9日に行なわれた第1回福沢研究センター講演会の概要である。)

「明治維新」論と福沢諭吉

わた なべ ひろし
渡 辺 浩
(東京大学法学部教授)



講演中の渡辺 浩氏

「明治維新」とは何だったのだろうか。かつては、マルクス主義的な世界史解釈に基づいて「典型的なブルジョア革命」とされたフランス革命と比較し、その「本質」が激しく議論されたりもした。しかし、そもそも「フランス革命はブルジョア革命だ」という理解

自体、フランス革命史研究者において、深く疑われている。では、「明治維新」とは、結局、何だったのか。

例えば、水戸学等に鼓舞された「尊王攘夷」論が導き、天皇を中心とする政治体制を実現した政治変革だという理解もかつてはあった。しかし、「尊王攘夷」論者の孝明天皇への態度は本当に「尊王」だったろうか。また、実際に「王政」が「復古」したと言えるだろうか。「攘夷」論者が権力を握ったら、直ちに「開国」の方針を採ったのはどういうことだろうか。つまり、「尊王攘夷」の標語を真に受け、明治維新を「尊王攘夷」のための変革だったと言うのは、余りにおめでた過ぎる。

ナショナリズムの革命だったという説もある。「国家」あるいは「民族」の独立維持のために、必要な大変革が行われたのだというわけである。しかし、本当に「独立」への危機感（それは単なる排外意識とは異なるはずである）が「反幕」「倒幕」を導いていたと言えるだろうか。

また、1850年代、60年代に「独立」の危機があったのだろうか。それは、「攘夷」論者の過剰反応に過度の先見性を読み込んでいるのではないだろうか。現に、例えば福沢諭吉は、『学問のすゝめ』四編（1874年刊）で、「我独立の保つ可きと否とに就ての疑問」が存在することを指摘し、「寒心」すべきことを説いている。この時点でも、「独立の危機」があることは改めて説かれなければならないことだったのである。

では、政治的標語に囚われず、政治行動の実態を眺めたならばどうか。例えば、それまで格の高いものの中央の政治から疎外されていた諸勢力（御三家と家門・外様大藩・禁裏と公家衆など）が政権に割り込もうとする権力闘争だったと見ることはできないだろうか。失敗したのが水戸家等、成功したのが薩長と禁裏というわけである。一理ありそうである。しかし、これではどうしても説明できないことがある。それは、その権力闘争の結果として、「藩」が破壊され、武士身分自体、自己解体したことである。

こうして考えてみると、結局、最も説得力があるのは福沢諭吉の「国権可分の説」や『文明論之概略』の説ではないだろうか。「門閥制度」と「専制」への積もり積もった憤懣こそが根本原因であり、その意味で「明治維新」は「自由」のための革命だったというのである。この古典的な解釈にはいくつもの長所がある。例えば、歴史の表面に現れた標語に眩惑されていないことである。また例えば、「革命家」の多くが下級武士だったことや、科举制度のあった清国や朝鮮国との相違も、明快に説明できるということである。

(本稿は2007年6月21日に行われた第2回福沢研究センター講演会の概要である。)

福沢諭吉の立身出世論

ティモシー ジェイ バン コンパノール
Timothy J. Van Compernelle
(ウィリアム・アンド・メアリー大学准教授)

4月21日のセミナーにおいて取り上げたのは、福沢諭吉の『学問のすゝめ』と立身出世主義との関係であっ

た。立身出世主義と近代教育制度が不可分にかかわっているということについては多くの指摘があるが、実は立身出世は様々なレベルで近代日本社会とつながっていると考えられる。教育制度に留まらず資本主義の発達や都市の拡大化、近代的階級の形成など、多様で複雑な問題と交錯しているのである。次の特徴があげられる。

1) 立身出世は、日本の産業革命の発展とともに徐々に日本全国に普及し、19世紀の終わりから大資本や教育機関が集中するようになった大都会や地方都市に人々を移動させるメカニズムとして機能した。2) 立身出世は、近代教育制度と結合し、学校現場において「成功」あるいは「上昇」という欲望を形成するイデオロギーであった。3) 立身出世は、江戸時代に生きた人々を支配する近世身分制度を否定するイデオロギーとして1870年代前半に福沢諭吉の『学問のすゝめ』や中村正直の『西国立志編』などによって誕生した。すなわち立身出世は、福沢や中村などのような下級武士の、幕藩体制とそれを伴う身分制社会への不満に始まり、その後近代的階級の形成や産業革命の開始と関わってきたと考えられる。

『学問のすゝめ』と資本主義との関係を読み解こうとする論文は少なくないが、セミナーにおける私の報告はこの問題を「翻訳」という概念で検討しようとする試みであった。一つのメディアから別のメディアへ、一つの思想体系から別の思想体系へなど、これらの過程を広い意味で翻訳と呼ぶことが出来る。福沢は『学問のすゝめ』などを書きおこすことによって西欧近代、特にある＜主体性＞を文明開化の道を辿りつつあった日本のコンテクストにもとづいて広義の意味での翻訳をしたと考えられる。ところが、『学問のすゝめ』はただ西欧近代を翻訳しただけではない。従来の研究の多くは福沢の思想と西欧の思想との関係性を主張してきたと言っても過言ではないが、最近の研究はあらためて福沢の著作を読みなおすことによって、儒学の影響を明確にしている。ここでも「翻訳」という観念は役立つだろう。明治期の啓蒙思想家は、一方では、西欧近代の様々な概念を導入（広義の意味での翻訳）したが、他方では、前の時代から受け継いだ儒学を新しいコンテクストに置き換えた（翻訳した）のである。ほかの学問的な言語がなかったため、福沢のような啓蒙思想家が西欧近代の様々なディスコースを日本に導入するためには昔から伝わってきた儒学のディスコースで言い表すよりしかたがなかったのである。

セミナーにおいては『学問のすゝめ』初編を例として、『学問のすゝめ』における西欧近代の思想と儒学の思想の交錯を具体的に考察した。こうして翻訳の過程と思想の衝突との交通によって新しい主体が日本で初めて姿を見せたと考えられる。それは、資本主義に支配された欧米列強にすでに存在し、『学問のすゝめ』などによって近代化しようとしていた日本に導入された主体である。しかもこれは、日本では産業革命が開始する前に福沢の『学問のすゝめ』などによって日本に翻訳された主体であり、資本主義の開幕の準備、あるいは資本主義の萌芽になったと位置づけることが可能である。その「立志主体」は身分制社会から開放され、個人性を始めとして、経済的な自由や所有権を持っている。この主体が努力して身につけようとしているのは、なによりも「学問」であり、この学問によって産業革命に適切な新しい社会的ヒエラルキーが形成され始めたのである。もしこの結論が正しいなら、福沢諭吉の『学問のすゝめ』が画期的なテキストだということを再確認できるであろう。

（本稿は2007年4月21日に行なわれた第1回福沢研究センターセミナーの概要である。）

福沢と漱石の個人観

— 「独立」の視座 —

グエン ティ ハイヌ トウック
Nguyen thi Hanh Thuc

（ホーチミン市外国語情報科学大学講師・福沢研究センター客員所員）

本発表の目的は、福沢諭吉（1834-1901）と夏目漱石（1867-1916）の個人観の主な特色を究明することにある。具体的に、個人は独立な存在であるという考えを共有する福沢と漱石の「個」への思索がどのように表れていたのか、比較考察をとおして探ることを目的としたい。

まず、「個」又は「個人」という詞は本来日本語ではなく、英語の individual という語に對し、当代の知識人、特に福沢がどのように思索してそれを表現し、また意志伝達をしたかなどの問題を考察した。ここで注目したいのは、西洋近代的な「個」の観念に対する福沢独自の解釈のしかたである。つまり、英語の individual に当たる

福沢のいう「人」とは、「一人の人間」であると同時に、日本という国を作りあげる各々の構成員でもあり、日本国に属している「人民」でもあるという新しい思想的内容を担っているのである。彼によれば、幕府の崩壊後、明治維新に変わっていても、「政府は依然たる専制の政府、人民は依然たる無気無力の愚民のみ」であったため、その状態を変えるには、まず何よりも一般人民が服従心を棄て、自主独立の精神を取り入れなければならないと考えたのである。したがって、福沢にとって、独立した個人とは、国家との相関関係においてみずからの民間の立場を意識し、政府と同等な立場で積極的かつ積極的に考えたり行動したりするものである。また、他の人々のことを意識しながらも自己確立をめざそうとし、法律を尊重しながら行動して独立した一個の存在を成すものであると考えられる。

ところで、福沢と異なる立場から個の問題を追求した漱石にしてみれば、「個人」とは、個性をもって individual を成し、あるいは独自の発展で独立する individual になるということではなければならない。要するに、個人は人類を代表するものであり、同時に自己を代表するものでもある。彼が言っている「個人」は二通りの属性、すなわち社会的側面と、精神的側面を持っている。前者は人類社会への所属の要望であり、後者は自己独自の風格や感受性によるみずから独立および創造的自己表現への要望である。こうしたような文化的見地から、漱石は個人の「インデペンデント」すなわち「独立」を追求した。端的に言えば、漱石による独立した個人とは、第一、仕事をとおして社会奉仕しながら、「道楽」の精神を活かして自己の存在の確立を全うするもの。第二、外界の刺激や影響を意識しながらも、状況に流されず、意図的に自己の内発的発展に向かうようにするもの。第三、「自己本位」に依拠し、意識的かつ創造的自己実現するものだといえる。

以上、漱石の個人観を福沢のそれに照らし合わせると、まず福沢の「人」は常に「政府と人民」という枠内でとらえられたため、「人民」すなわち社会的な個の側面が強調されたことに対し、漱石の「個人」は「自己と他人」という構想のもとで求められたゆえ、内面的な個の側面に重点が置かれたといえることができる。そして、二者ともに「独立」という要素を基本にしていながら、福沢においてみる個人の独立は、独立国家または文明国

家の構築を促すものになると考えられたため、富強国家の形成の前提にされているのに対し、漱石では、社会と関わりながらも、個人そのものが先行すべきであると考えられたため、個人の独立は人の自己実現の基盤とならなければならない、というそれぞれの特色を持っていると考えられる。

福沢および漱石の個人観を考察する機会を通して、改めて認識し得たことは、「個」として生きるとは、自己以外の社会や国家の制御を脱し、自分の立てた規範に従って行動することである、ということである。彼らのめざした「個」の在り方は、今日においても考慮する価値のある現実問題である。というのは、いかなる時代においても、確固たる「個人」が必然的に求められるからである。また、国際化・情報化時代の現代では、世界各国が緊密化し、国家間の相互理解が進む一方で、逆に緊張もますます高まってくることも事実である。したがって、人々はみずからのアイデンティティを守る必要に迫られると同時に、共存のための新しい世界秩序を確立する必要性も意識しなくてはならない。それゆえ、国家規模にせよ個人単位にせよ、「個」の確立は普遍的な意味をもつことであると私は確信する。

(本稿は2007年7月14日に行われた第2回福沢研究センターセミナーの概要である。)

◇2007年度秋学期シンポジウムのご案内

海をわたる『福翁自伝』—翻訳から考える福沢諭吉—

日時：11月2日(金) 午後1時30分～午後5時15分

場所：慶應義塾大学三田キャンパス

図書館旧館2階大会議室

◇開催にあたって 岩谷十郎(法学部教授)

◇報告：『福翁自伝』の外国語訳をめぐる

・アルバート・クレイグ

(ハーバード大学名誉教授)

・林宗元(韓国 慶東大学校教授)

・ファン・テイ・トゥ・ジャン

(ハノイ国家大学講師)

・マリオン・ソシエ

(フランス国立東洋言語文化研究所教授)

◇パネルディスカッション

◇総合司会 西沢直子(福沢研究センター准教授)

※シンポジウムは日本語で行われます。

※入場は無料、事前予約は不要です。

平成19年1月から8月までに収蔵された資料のうち、主なものを紹介する。

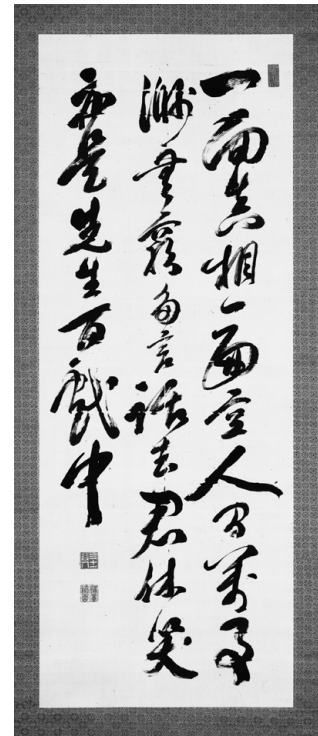
福沢諭吉遺墨

■ 漢詩「一面真相一面空 人間萬事渺無窮 多言話去君休笑 亦是先生百戲中」 1幅 【綿貫民輔氏寄贈】

一面は真相 一面は空 人間万事 渺（びよう）として窮（きわま）りなし
多言 話し去るも君笑うを休（や）めよ また是れ先生百戲の中

「題福翁百話巻首」と書かれたものがあり、『福翁百話』が発表された明治30（1897）年の作と推定される。関防印（書幅の右上に押し、書出しの位置を知らせる印）は「無我他彼此」。本来は仏教語であらゆるものが円満に存在するさま。「ガタピシ」の音で歪みがないことともかけていると思われる。落款には「三十一谷人」（「世俗」という文字を「卅一」「人谷」に分解したもの）「福沢諭吉」が用いられている。

この書幅は、綿貫民輔氏より寄贈を受けた。箱書から綿貫氏のもとに至るまでに犬養毅、小泉信三、阿部能成の手を経ていることがわかる。犬養毅は安政2（1855）年生まれ。明治8（1875）年に郷里岡山から上京し、3月慶應義塾に入った。すぐに『郵便報知新聞』などに寄稿するようになり、在学期間は短かったようであるが、福沢との交流は続いた。昭和7（1932）年、慶應義塾創立75年記念式典に首相として出席した6日後、5・15事件に倒れた。小泉信三は明治21年東京生まれ。普通部から慶應義塾に学び、卒業と同時に教員となる。昭和8年から22年まで塾長を務めた。阿部能成は明治16年松山の出身で、哲学者・教育家。東京帝国大学卒業後、京城帝国大学教授、第一高等学校長を務め、戦後は文部大臣や学習院長を務めた。慶應義塾で講義を受け持ったこともある。綿貫民輔氏は昭和2年富山生まれ。昭和25年慶應義塾大学経済学部卒。44年より13期連続で衆議院議員当選。第70代衆議院議長。



■ 漢詩「昨夜炉辺談笑親 病床今日看酸辛 家門多福君休道 吾羨世間無子人」 1幅 【購入】



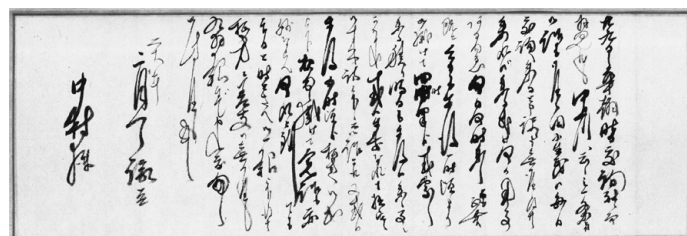
昨夜は炉辺に談笑親しかりしに
病床に今日は酸辛を看る
家門多福なりと君いうをやめよ
吾は羨む世間の子なき人を

「己丑十月長女罹急性病記為山本君」とあるが「山本」は未詳。明治22（1889）年に家族揃って関西方面へ旅行に出かけ、帰宅後しばらくして、突然長女さと（里）が腸チフスを発症し生死の間をさまようことになった。10月17日に発病して、25日ごろには重篤であったが、松山棟庵・印東玄得両医師に助けられ、約1か月後には全快した。「昨夜までは炉辺で親しく談笑していたのに、今日は病床で苦しむ姿をみなければならない。子どもが大勢でめでたいなどと言ってくれるな、私は子のない人を羨ましく思ってしまうほどだ」とは、子煩悩な福沢の率直な気持ちであろう。

関防印は上掲書幅同様「無我他彼此」。落款も同様で「三十一谷人」および「福沢諭吉」。

福沢諭吉書簡

■ 中村道太宛 明治28（1895）年2月1日付 1幅 【購入】

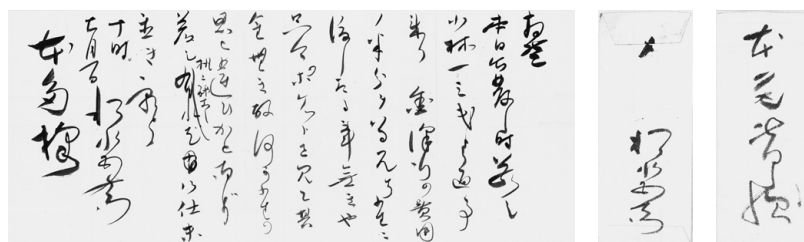


『福沢諭吉書簡集』（岩波書店、2001～3年）未収録。宛先は書簡の保存経緯から中村道太と知れる。中村は天保7（1836）年豊橋藩士の子に生まれ、慶応2（1866）年江戸出府中に、そのころ築地鉄砲洲にあった福沢の塾を訪ねて交流が始まった。明治維新後は商売を始め、丸屋商社や第八国立銀行などに携わり、横浜正金銀行の初代頭取や東京米商会所頭取も務めたが、いずれも経営上の問題が起こり退任した。明治21（1888）年慶應義塾に煉瓦講堂を寄付した。書簡の内容は、福沢の甥にあたる中上川彦次郎に関する相談があり、面会日を調整するため予定を告げたもの。中村道太宛書簡はすでに連名も含めると73通が知られていたが、本書簡は新資料である。

慶應義塾関係資料

■ 本多一太郎氏・次郎氏旧蔵写真および書簡 【本多孚氏寄託】

本多一太郎氏は明治27（1894）年慶應義塾卒、子息次郎氏は大正14（1925）年経済学部卒。寄託をうけた2冊のアルバムには、それぞれの学生時代を中心とする写真が貼り付けられ、一太郎氏旧蔵分ではまだ幼顔の塾生たちによる結社や、次郎氏旧蔵分では修学旅行の様子が伺える。また書簡は一太郎氏宛の平沼亮三（実業家・政治家）や、次郎氏宛の名取和作（義塾教員）・加藤武男（実業家）・松永安左エ門（実業家、電力王）など計10通。次郎氏は東邦産業研究所の常務理事であり松永と親交が深かったため、資料には小泉信三宛松永安左エ門書簡も含まれている。本多孚氏は昭和33年経済学部のご卒業で、3代にわたる塾員である。



本多次郎宛松永安左エ門書簡

■ 慶應義塾商工会発行 商工学校関連絵葉書

大正元（1912）年10月発行の「修学旅行 発火演習 記念絵葉書 慶應義塾 商工会発行」はすでに知られていたものであるが、「慶應義塾 商工学校 奨励会 展覧会記念」2枚はこれまでに架蔵されていなかったもの。

寄贈していただいた森利子氏によれば、森新太郎氏は明治32（1899）年生まれ、9歳まで上海で過ごし、幼稚舎の寄宿舎に入った。

【森利子氏寄贈】



■ 主な新収資料

■ 松永安左エ門書木額 1点 【高木勇氏寄贈】

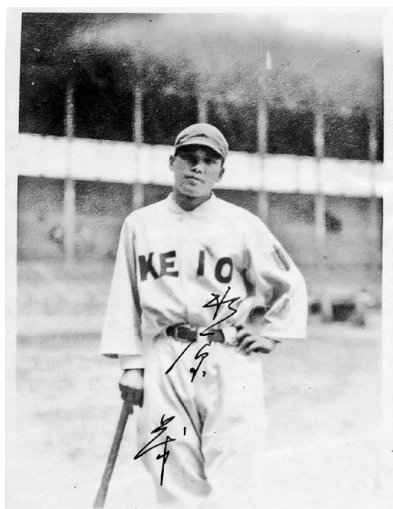
寄贈者の高木氏は平成16年特選塾員で、魯山人を中心とする美術品蒐集家。「杉蔭亭」の文字と、「耳庵九十五」の署名を刻んだ木額である。裏面には「昭和四十四年十二月小柳津宗芸刻」とある。「耳庵」と号した松永安左エ門が95歳の時に揮毫した文字を刻んだもの。「杉蔭亭」は茶室の名であるが、越後の富豪で茶道家、大塚杉陰（おおづかさんいん）から付けたものと思われる。松永は明治8（1875）年長崎岐島生まれで、明治22年慶應義塾に入り、31年に中退。在学中は、福沢諭吉の散歩に同行する「散歩党」のメンバーとして福沢に親炙した。その後実業界入りして電力事業で活躍し、戦前には東邦電力（現中部電力）を創業、戦後は電気事業再編で電力国営化反対の立場を貫き、民間9電力体制に導いたことなどから、「電力王」「電力の鬼」と呼ばれた。また、数寄者、古美術品蒐集家としても著名であった。義塾に対しては、現在の志木高等学校の土地を寄付するなど、貢献すること多く、昭和43年には名誉博士号を贈られている。昭和46（1971）年死去。



■ 慶應義塾大学野球部員署名入り写真コレクション 48点 【購入】

今年6月5日、ニューヨークのサザビーズの競売に日本人の野球愛好家、故・藤田光彦氏（男爵藤田伝三郎の孫、1911年神戸出身）が収集した1920年代末から1930年代初めの日本の野球選手の直筆サイン入りボールと大量のアルバム写真のコレクションが出品された。藤田氏は、写真と野球が趣味で、試合を観戦した時に自分が撮った写真を当日現像し、一族が経営するホテルに滞在する選手らを訪れてサインをもらっていたと言う。この中には、日米野球で来日したペーブ・ルースやルー・ゲーリックなどの米国の花形選手や六大学野球に関する品も多数含まれていた。

センターでは、滞米中の義塾教員よりこの競売に関する情報を得て、この中の1品目の慶應義塾体育会野球部選手の写真コレクション48枚セットに入札し、落札することができた。この写真群には、昭和初期の義塾野球部の黄金時代の選手（水原茂や山下実、宮武三郎他）と名監督、腰本寿他関係者らの直筆サイン入り写真も含まれており、おそらく関西遠征時に甲子園球場で撮影されたものと推察される。



■ 専任研究員研究室の設置

本センターは、2005年4月より専任研究員を置くようになったが、その研究室は用意できずにきた。しかし、本年度より南館に2室の研究室を割当てられ、4月より使用を開始した。なお、この研究室は、三田キャンパスの校舎建替計画を考慮し、取り敢えず3年間の使用割当てとなっている。

■ 講演会・セミナー

ここのところ講演会・セミナーは学期ごとに統一テーマを設定してプログラムを組んできた。しかし、興味深い研究をされている方でも、さまざまな条件から、統一テーマの下に組み込み難い場合もあり、そのような方に講演をお願いすることを逸してきた。そこで、今後は、自由に講演者・講師を選ぶために、統一テーマを定めない学期も設けることとした。本年度春学期は、この形で、本誌に要約を掲載した講演会2回とセミナー2回を開催した。結果としては、4回のうち3回が海外研究者によるものとなり、本センターの活動が海外との結びつきを強めていることを実感させるものとなった。

ところで本センターは、現在、福沢著作の外国語翻訳助成基金の設立を準備している。秋学期は、この基金の立ち上げを記念して、7頁に予告したような国際シンポジウムを開催することとした。また、それとは別に、セミナー1回も予定している。

■ ワークショップ

春学期は、4月14日に、報告者に児玉圭司君（清和大学講師）を迎え「明治初期の東京府における監獄行政の転換」というテーマで、また6月30日には近世近代交流研究会との共同で、報告者に十川陽一（義塾文学研究科博士課程）・児玉圭司（清和大学講師）・出口雄一（桐蔭横浜大学講師）の3君を迎え「法史学研究の現状と課題」というテーマで、ワークショップを開催した。ワークショップは、塾内外の所属を越えた若手の勉強会として、研究所本来の近代日本研究の機能を守っている。

■ 出張史料調査

前号で紹介した浜松の福沢門下生伊東要蔵家の調査を6月4日、8月24日に行い、8月29日には整理のため同家資料を福沢研究センターに収容した。また6月16日には、所員が大阪府堺市在住福田充利氏にお会いし、ご所蔵の福沢諭吉書簡を撮影した。書簡はこれまで未発表の新しい資料で、大島為右衛門妻「なか」へのお礼を渡してくれるよう丸善に依頼したものである。「なか」は福田氏のご先祖にあたり、為右衛門と福沢の父百助が懇意であったことから、諭吉の乳母をつとめたそうである。この書簡については、『近代日本研究』24号において詳しく紹介する。

■ 『アジア太平洋戦争における

慶應義塾関係戦没者名簿』の刊行

8月21日に「福沢研究センター資料11」として、標記の名簿が刊行された。この名簿は、経済学部名誉教授白井厚氏を中心とするグループが、16年間をかけて各種資料を博捜して調査した成果。調査開始以前に把握されていた戦没者は約1,100名であったが、この名簿では2,223名の戦没者・戦没地等が収録されている。頒布は慶應義塾大学出版会で行っている。

■ 『慶應義塾150年史資料集』編纂の進行状況

別巻1『慶應義塾史事典』（2008年刊行）は、約7割強の項目原稿を回収。毎月の編纂委員会以外に、3月19日～21日、同30日～4月1日、8月16日～19日の3回、延10日の合宿を行い、回収原稿の整理を行い、加筆訂正のためのコメントを付した。年内に初校を回収する計画で作業を進めている。別巻2『福沢諭吉事典』（2009年刊行）も、この半年で5回の編集委員会を重ねたが、中でも8月には、2日間、終日の編集委員会で、収録項目の検討、試書き原稿の回し読みを集中的に行った。本編の第I期第1巻～第4巻については、調査員を中心に収録予定資料の整理入力を進めている。

■ 創立150年記念展覧会準備の本格化

3月以降、創立150年記念展覧会ワーキンググループは、東京国立博物館、福岡市立美術館、神奈川県立歴史博物館、大阪市立美術館の4館で2008年末頃から記念展を開催する方針をさらに詰めている。同グループには、福沢研究センターより、所長、専任所員、事務長などが参加し、展覧会内容の企画を担当してきた。同グループは8月30日に実行委員会に改組され、4館を対象とした歴史展示の主要な部分につき、その準備をセンターが担うことになった。

■ 初期女性教員への聞き取り

『慶應義塾150年史資料集』第2巻の資料準備をかねて、慶應義塾大学の初期女性教員である、米津昭子名誉教授、平野絢子名誉教授の2氏にインタビューを行った。米津氏は終戦後旧制大学に入学し、また平野氏は新制大学第1期に入学し、その後、それぞれ法学部、経済学部に残られた。どちらのインタビューも4、5時間に亘る長時間のものとなった。なお米津氏への聞き取りは、港区立男女共同参画センター（リーブラ）との共同事業。

福沢研究センター諸記録（3月～8月）

■ 諸会議

- *平成18年度第3回運営委員会（3月9日）
- *平成19年度第1回運営委員会（6月21日）
- *平成19年度第1回センター会議（5月25日）
- *平成19年度第1回執行委員会（5月22日）
- *『慶應義塾史事典』編纂委員会
 - 第1回合宿（3月19～21日：図書館旧館小会議室・展示室）
 - 第2回合宿（3月30日～4月1日：クロス・ウェーブ東中野）
 - 第21回（5月2日）、第22回（6月7日）
 - 第23回（7月18日）
 - 第3回合宿・第24回編纂委員会（8月16～19日：ブルーウェーブイン浅草）
- *『福沢諭吉事典』編集委員会
 - 第10回（3月12日）、第11回（4月25日）
 - 第12回（5月23日）、第13回（8月11日：ブルーウェーブイン浅草）、第14回（8月31日）
- *『慶應義塾150年史資料集』第1巻編集委員会
 - 第5回（5月11日）
- *創立150年記念誌刊行委員会
 - 第4回（6月29日：図書館旧館記念室）
- *創立150年記念講演会実行委員会準備会（3月7日）
- *創立150年記念講演会実行委員会
 - 第1回（3月19日：塾監局第3会議室）
- *創立150年記念展覧会ワーキンググループ会議
 - 第8回（4月6日）、第9回（6月1日）
 - 第10回（6月22日）
- *創立150年記念展覧会実行委員会
 - 第1回（8月30日）
- *ワークショップ
 - 「明治初期の東京府における監獄行政の転換」
 - 講師：児玉圭司氏（4月14日）
 - 「法史学研究の現状と課題」（近世近代研究交流会との共同開催）報告者：十川陽一氏、児玉圭司氏、出口雄一氏（6月30日）

■ 人事

- 〈客員所員〉
 - 新任 グェン・ティ・ハイン・トゥック 4月1日～
- 〈委員〉
 - （文）井奥 成彦（『近代日本研究』編集委員）
平成19年4月1日～平成20年3月31日
- 〈設置講座〉
 - *坂井達朗名誉教授と交代
 - （商）牛島 利明（『近代日本研究Ⅰ』）4月1日～
- 〈事務局〉
 - 退職 柄越 祥子（非常勤嘱託）～3月31日
 - 新任 神崎 慧子（事務嘱託）4月1日～
 - 石井寿美世（非常勤嘱託）4月1日～
 - 都倉 武之（非常勤嘱託）4月1日～9月30日
 - 山本さをり（派遣職員）の長期休暇に伴う交代要員）
5月1日～6月8日

■ 来往

- *客員所員松沢弘陽氏、資料調査（3月12日、5月23日）
- *宮内庁書陵部福井淳氏ほか1名、資料閲覧（3月12日）
- *塾員島崎一郎氏、資料を寄贈（3月14日）
- *中部学院大学片桐武司氏（3月15日）
- *高橋和雄氏（高橋岩路氏子孫）（3月16日）
- *塾員杉山真紀子氏（谷口吉郎氏令嬢）、著書『萬来舎』を寄贈（3月19日）、写真閲覧（4月5日）
- *日本テレビ紀内良彦氏、番組取材（3月27日）

- *韓国関東大学校林宗元教授（2007年度、経済学部招聘・訪問教授として在籍）、来訪（4月2日～）
- *塾員廣部亮一郎氏ご夫妻、展示室を見学（4月3日）
- *2007年連合三田会実行委員宮本敏之氏ほか、資料閲覧（4月17日、6月14日、8月17日）
- *鈴木隆男氏（鈴木閑雲子孫）、資料閲覧（4月18日）
- *永井寿満子氏ご夫妻（中村道太子孫）来訪（4月24日）
- *中央大学教授山口浩氏（小幡英之助子孫）（4月27日）
- *法政大学教授笹川孝一氏、学生が展示室を見学（5月1日）
- *柴林弘氏ご夫妻（塾員柴林宗太郎の子孫）（5月10日）
- *塾員佐々木亮氏（5月23日）
- *鳥羽市教育委員会（6月26日）
- *朝日新聞社吉沢龍彦氏、記事の取材（6月26日）
- *旧邸保存会理事長は永修治氏、園憲一事務長（7月5日）
- *富田榮子・隆太郎氏、資料寄贈の相談（7月18日）
- *宗澤拓郎氏、資料調査（7月25日）
- *客員所員平山洋氏、資料調査（7月25日）
- *環太平洋大学協会会議の参加者、展示室を見学（7月30日）
- *延世大学王賢鐘教授、調査協力のため来訪（7月7日）
- *神津克己氏、書簡調査のため来訪（8月6日）

■ 出張・見学

- *西沢助教授、総合女性史研究会2006年度大会（港区立男女平等参画センター）に出席（3月24～25日）
- *小室所長（旧邸保存会理事会出席）、西沢助教授（記念館の書幅付け替え）、中津に出張（3月28～29日）
- *西沢准教授、酒井事務長、東京都写真美術館の収蔵庫を見学（4月25日）
- *西沢准教授、福沢記念館第1回評議員会出席のため中津に出張（5月14日）
- *西沢准教授、韓国（延世大学ウォンジュキャンパスほか）に出張（5月19～21日）
- *赤堀係主任、全国大学史資料協議会東日本部会幹事会および2007年度総会（日本大学会館）に出席（5月24日）
- *小室所長、東洋大学井上円了記念学術センター運営委員会に出席（5月25日）
- *西沢准教授、講義および公開講座出席のため名城大学（名古屋）に出張（5月30～31日）
- *西沢准教授、石井非常勤嘱託、伊東家（浜松市）にて資料調査（6月4日）
- *西沢准教授、新資料撮影のため堺市の福田充利氏を訪問（6月16日）
- *西沢准教授、日本ビューリタリズム学会（聖学院、上尾市）で報告（6月22日）。
- *酒井事務長、徳永調査員、第4回ニチマイ・アーカイブレコーディングセミナーに出席（7月19日）
- *西沢准教授、酒井事務長、都倉非常勤嘱託、福沢記念館（中津）にて資料のインベントリおよび収蔵庫設置の打ち合わせ（7月23、24日）。
- *西沢准教授（記念館展示換え）のため中津に出張（8月28～30日）

■ その他

- *福沢研究センター設置講座ガイダンス（4月6日）
- *麻疹の流行により5月26日～6月1日まで休講
- *メディアセンターと共同で福沢著作（版本）の電子公開を開始（7月2日）
- *収蔵室の燻蒸（隔年）を8月9日～15日にかけて実施
- *事務室の窓枠塗装、地下洗面所の改修工事（夏季休業中）
- *日本教育学会第66回大会に展示協力（8月29～30日）

慶應義塾福沢研究センター通信 第7号

Newsletter of
Fukuzawa Memorial Center for
Modern Japanese Studies,
Keio University

発行日 2007年9月30日（年2回刊）
編集 慶應義塾福沢研究センター
発行
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45
電話 03-5427-1603
http://www.fmc.keio.ac.jp/
印刷（有）梅沢印刷所